越谷市内の「南百（なんど）の百万遍」

加藤幸一

越谷市内の吉川（よしかわ）橋を渡る手前は、江戸時代は南百村と呼ばれていた地域である。現在の東町（あずまちょう）の北部にあたる。「南百」という字を初めて見る人は、「なんびゃく」とか「みなみもも」などと読みがちであり、「なんど」と正しく読むことは皆無であろう。これは江戸時代からの地元独特の読み方である。なぜこのように読むに至ったかについては、いまだ謎のままである。

一方、「南百」の地名の由来に関しては、戦後まで地元の古老の間で受け継がれてきたという言い伝えがある（高崎力（つとむ）氏）。吉川橋の東、現在の南百農村センターの南西隣に広大な敷地（東町二丁目一三三）が残っていて、遠い昔はここに「お屋敷」があったとされ、そこには楠（くすのき）と柏（かしわ、ここでは栢）の大木がそびえたっていて、船頭の目印になったという。この二本の木の名前の漢字のうち木へんをそれぞれ除いて、それを「南百（南白）」との村名にしたという興味を引く言い伝えである。真偽はともかく、後世に残しておきたい伝説である。

南百の村名の由来には他にも二つの説がある。かつては「難渡（なんど）」と書かれ、元荒川と古利根川（中川）の合流地点にあったために渡るのが難しかったから名付けられたとの説、「渡（ど）」とは「渡し」という意味ではなく、二つの川が合流する地点という意味で、つまり二つの川が南に合流するところを意味していたとの説である。謎が謎を呼び、ロマンが駆り立てられる。

この南百には他には見られない大変独特な祭りが見られた。古くから毎年七月十八日に水神社の祭礼として行われる「百万遍（ひゃくまんべん）」の行事である。一般的な「百万遍」念仏とはかなりかけ離れた奇祭と

写真１　解体される前の南百の水神社

言える。現在は十八日にこだわることなく七月の第二日曜日に変更されている。

現在見られる新築の水神社は、もとあった元荒川沿いの右岸の場所から移転してきたものである。もとあった本来の場所は、吉川橋と中島橋の中程の吉川県道沿いであった。その古い水神社の建物【写真1】の屋根には、竜の鏝絵【写真2】が棟に沿って大きく描かれていた。古利根川（現・中川）の水流に逆らって泳ぐ竜（水神様）が見られる。頭を進行方向の反対側に振り向き、頭のそばの右手が描かれ、しっぽの先端はよじれている。今日の文化財にも匹敵する程の大作であり、それを短時間で仕上げた左官職人の技術の高さが窺える。残念ながら水神社の建物を取り壊す時に破損したために処分されてしまった。平成十七年（二〇〇五）頃のことであった。

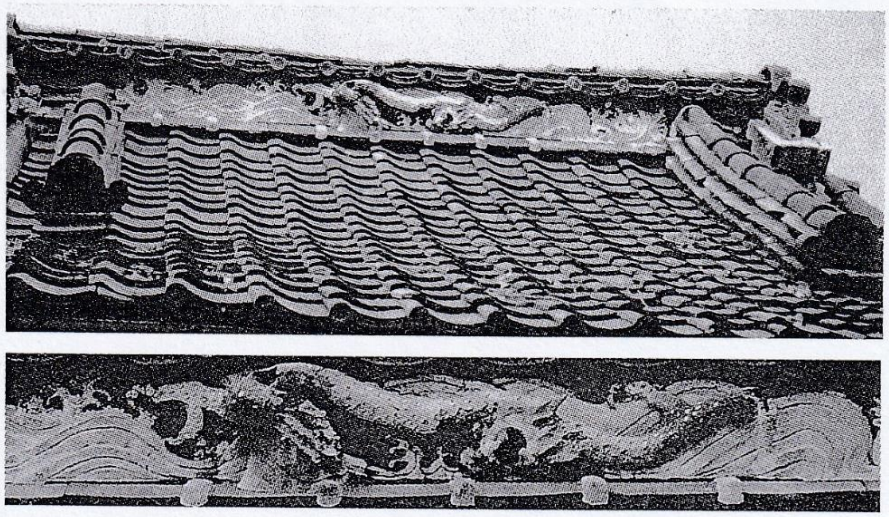


写真２　竜の鏝絵（上は屋根の棟に沿って見られる竜、下はその拡大）

七月に実施する恒例の水神社の「百万遍」の祭りに向けて、四月にまず「蛇縒り」の行事が行われる。藁を蛇の形に縒った注連縄作りである【写真3】。全長は約七～八メートル、太さは約三十センチ、頭部の二本のそれぞれの角の長さは八十センチである。その日のうちに完成させ、水神社の社前に奉納される。社前の左右両側にケヤキとイチョウの木がある【写真4】。【写真5】は、切られたケヤキとイチョウの切株である。二本の角が生えた竜を、頭をケヤキ側（西向き）、しっぽをイチョウ側（東向き）に架けて設置した【写真6】。本来は四月二十一日に行われたようであるが、現在は四月の日曜日となっている。百万遍が行われる七月十八日まで祀られる。

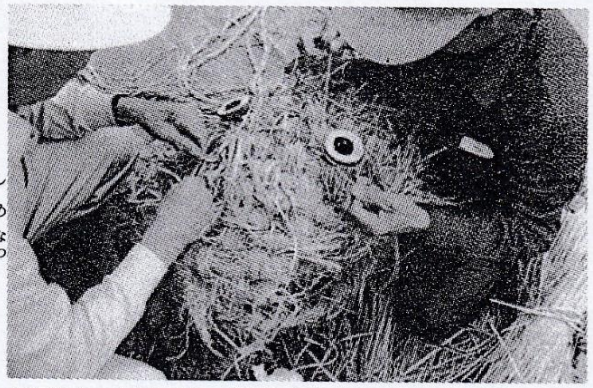


写真３　蛇縒りの頭部を作成している様子
（目玉が一対みられる。２本の角はこのあと取り付けられる）

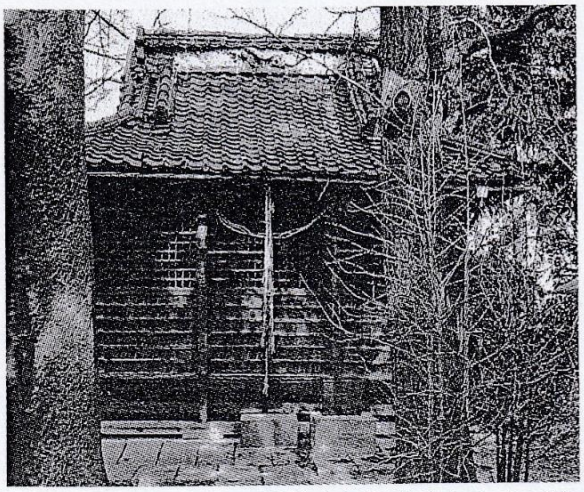


写真４　社前の前の蛇縒りを架けるケヤキ（向かって左）とイチョウ

七月十八日の朝には、さらに直径三メートル程もある太縄の輪を藁を縒って作る。その出来上がった藁の輪を若者たちが持って百万遍の行事が始まるのである。藁で作った大きな輪は、百万遍に使われる数珠の代わりとしたものであろう。百万遍の数珠の功徳を大きな藁の輪に代え、それを若者達が村内を一軒一軒持ち歩いて廻り、家内安全を祈ったのである。

百万遍の行事は朝から開始される。数人の若者が大きな藁の輪を持ち歩く。最初は屋号が「医者さま」と呼ばれた鈴木家から始まり、南百の地元三十数戸を鉦や太鼓で賑やかに巡る。各家の土間に入り、何人かで持った大きな藁の輪を土間の中で持ちながら時計回りにぐるっと一回りして終わる。最後に一本締めをして五穀豊穣を祈る。村内を巡回する時は年配者がてんびん棒に吊り下げられた鉦や太鼓などの鳴り物を打ち鳴らしながら巡回する。その時、藁の輪と同じくらいの大きさの大数珠も他の年配者が持ち歩いた。通りに人がいると大きな大数珠をその人の頭に軽く載せて疫病除けをした。巡回の途中から若者は羽目を外し始め、若者同士が隙あらば家の台所にある鍋釜の墨を塗ったり、冷たい井戸水をかけあったりした。顔や体全体が墨だらけになる程である。各家にいる子供たちはその姿を見て怖がったそうである。最後に西耕地（「西の妻」とも呼ばれ、元の場所から移転してきた現在の水神社あたり）の用水べり（現在の水神社の東側の堀）に集まり、相互に隙をみては堀や田んぼに突き落としたり、中には両手と両足を取られてそのまま水平に堀や田んぼの中へ投げられる者もいた。そのため俗に「どろんこ祭り」とも呼ばれた。

百万遍の行事が終了すると、社前の蛇縒りは外され、蛇

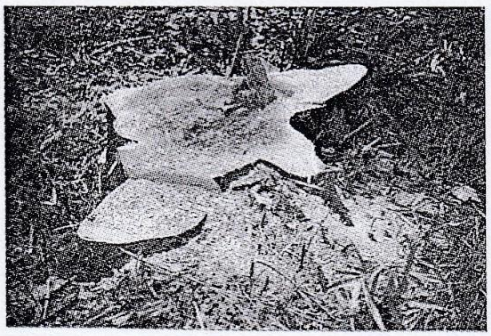


写真５　切られたケヤキ（向かって左）とイチョウの切株

写真６　社前の注連縄「蛇縒り」

縒りと村内の巡回に使った藁の輪を吉川橋【写真７】から中川の下流に流して終了した。

下流側の川の中で待ち構えていた若者達が、橋から落とされた蛇縒りと藁の輪を川の中ですぐに解体し、蛇縒りの芯として使われていた竹のみを回収する。藁はそのまま下流に流されていった。しかし下流の岸を汚すため、のちに吉川橋から蛇縒りや輪を川に流すことは取りやめになった。そして、水神社の境内で解体するようになった。

この百万遍の祭礼は蛇縒りと輪を川に流して終わるのである。百万遍の数珠は巡回中に年配者が持ち歩くだけであるが、昔は全員で集まって「大数珠」（百八つの十倍の数の千八十個の玉からなる）を順繰りに回す本来の百万遍の行事が行われていたのであろう。流し終わった後は、各自が自宅に戻る。泥まみれの若者は風呂に入る。そしてお昼に集会所（現在の南百農村センター）に集まり、酒と精進料理が振る舞われる直会（なおらい）が始まるのである。

この地独特の百万遍は、無形文化財的観点からして他の地域に類をみない異彩を放った行事であり、手の凝った蛇縒り作りも地元の誇りとして残したいものである。

なお、この百万遍の行事と同時並行して行われる行事に「辻札（つじふだ）」がある。東町（あずまちょう）二丁目一八七の豊田家では、古くから香取市山倉（やまくら）の山倉大神（だいじん）のお札をいただきに毎年参拝し、その山倉様のお札【写真８】は、南百村鎮守（ちんじゅ）の水神社の祭礼のお札として使われ

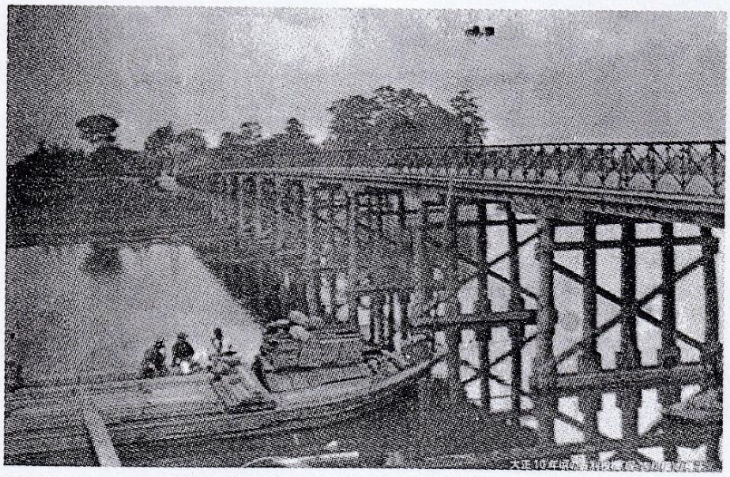


写真７　大正期の吉川橋

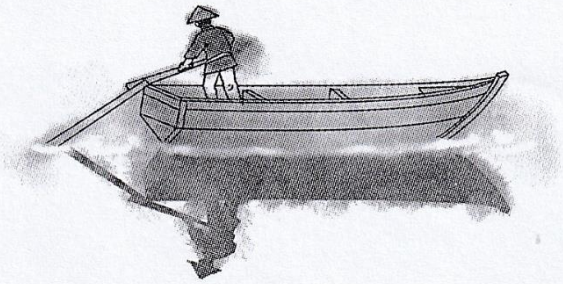
吉川橋の手前下流に肥船が停留、上流で人糞を陸揚げする。吉川橋の対岸下流の岸は南百側の肥船の陸揚げ場所である。また吉川橋の上流側に見られる木々は水神社の鎮守の森。

写真８　山倉様のお札

る。四月に「蛇縒り」（竜の形をした注連縄）作りの時に蛇縒りの太くなった中央部に取り付けられる【写真9】。それとともに他のお札を竹の最上部に挟んだ辻札を村の周囲の六カ所に立てて設置し、外からの外敵を村の中に入らないようにしているのである。七月十八日の百万遍の巡回の時に六ケ所の辻札は順次取り払われる。六ケ所の辻札が設置される所は、飯島辻、西の妻辻、苗間辻、四条辻、吉川橋辻、中島橋辻である（地図「辻札設置場所」）。

写真9　蛇縒りに取り付けられたお札

村を悪霊の侵入から守るために行う辻札の行事は、今もなお続けられている。無形文化財的観点からしても百万遍念仏の行事とともに後世に残しておきたいものである。

調査協力者　豊田武司氏、浅見照男氏、豊田潔氏

写真提供者　写真1・3・4・6・8・9は、豊田武司氏
写真2・5は、曽根憲次氏
写真7は、二〇一六年八月の「広報吉川」より抜粋